同朋 2025 9 September

CONTENTS

02 インタビュー 五味太郎
人間って何もわかっていないからね。そういう安心感があるよ。

特集

05 ZINE（ジン）——誰にも頼まれていないけど作りたい私のメディア

06 【ルポ】自分の思いを綴って誰かに手渡す「ZINEフェス」の活気
紙とペンを持って何かを作るのがやっぱり一番面白いと、私は思ってしまうんですよね。／野中モモ

08 本もどき／panpanya

14 遅くて、おもしろくて、未知の世界をZINEで。／SAPPORO POSSE

17 【コラム】ブ・ポ・ソの語り場 受けとめると作りたくなる——浄土真宗とZINE？

21 連載
どうぼうパズルdeひとやすみ
古写真でつづる東本願寺
後生の一大事を心にかけて——ニューヨークから開教便り／名倉 幹
唯信鈔文意を読む——唯念仏のこころ／山田恵文
出会いの真実——嘆仏偈を読む／宮下晴輝
ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一
息できる風景／森泉岳土
歌壇／永田 淳　俳壇／安原 葉
同朋のひろば
仏事作法のひとこま／近松 誉
キッチン菜時記／飛田和緒
あなたのとなりの僧侶
哲学者と僧侶／中山善雄
これまでの『一切の幸せ』
一切の幸せ／作＝岩川ありさ　絵＝惣田紗希
生きづらいこの世界でも／竹田ダニエル
日々平熱のソウル／中田 亮

＼ 表紙絵 ／
北村 人（じん）
絵本作家＆イラストレーター

人間って何もわかっていないからね。そういう安心感があるよ。

五味太郎（ごみたろう）（絵本作家）

1973年の『みち』を皮切りに『きんぎょがにげた』（1982年）など、これまで描いた絵本は400冊以上。世代、国を超え、親しまれています。世に生まれ、育つこと。絵本のこと。わからないから楽しめること。日々思いめぐらせ、絵を描いているアトリエで語ってくれたお話です。

撮影：天日恵美子

五味さんの「生命観」

——五味という名字は、もしかして仏教由来ですか。

親父が「大変な名前」って言ってたけど、要するに、さとりのための五段階があって、最初は乳味（にゅうみ）っていう生の味。次は酪味（らくみ）、生酥味（しょうそみ）、熟酥味（じゅくそみ）、最後は醍醐味（だいごみ）。この五つを五味と言うそうだ。それぞれヨーグルトとかチーズ味のことだろうね。

——牛乳の精製過程における五つの味が仏陀（ぶつだ）の教えにたとえられたのですよね。さて、五味さんは絵本作家と名のっておられます。「児童書」ではなく「絵本」を作っている、と。

うん。おれはやっぱり子ども（も）読める本というのが描きたくてな。子どものためとか、そういうのはやめたほうがいいとずっと思ってる。つまり、愚かな者を導いてあげようなんて気が全然ないんだよな。「ちょっとおもしろいストーリーを考えて、カッコいい絵を描いたんだけど、どう？」って出し方。すると、子どもって、おれの同志だから「わかるわかる」って信用してくれるわけ。きっと、おれの生命観がほかと違うんだろう。↑

世の中には、子どもは無垢で生まれ、色々と注入されて、どんどん立派になっていくという生命観もある。でも、おれは子どもって、かなり充足したまま生まれてくると思っている。そういう生命観だよね。

たとえば、植物や動物を見ていても、自分で生きて育っていくわけだ。でも大人は、文字も算数も、何もかも自分たちが教えるから、子どもはわかるようになるんだと思いたい。だが本当は、子どもは自分で聞いて、見て、あるいは触って、獲得していくわけだよ。唯一わからないのは社会構造。だって、それは大人が作ったものだから。道を渡るのに、ここは自動車の通る道、ここは人が通る道っていうのは大人の都合でしょ？

つまり、子どもは「あー、うー」とか、しゃべるのが先でね。母音やら子音があって、と整理するのは後から興味が出ることで、そんなことを学んでからしゃべるんじゃない。そういうことがわからないと、人間がどう育つのかを見抜けない。

そもそも人間って、実は生まれつき個性っていうのがあるわけ。個体が全然違うの。ばらばらなんだよ。これをほとんど無視して、横並びで同じテストをしようなんて考えるのは非科学的なんだよね。根本的に違う者がそれぞれの成長をしていくというのが大原則なのに、同じ方向に持っていこうとするから苦しくなる。

平等って言葉がなかなかわからないのは、そこなんだよ。個々ばらばらなんだよね。だって、おれ一所懸命がんばったけれども、身長170センチいかなかったからね。どう考えたっておかしいだろう？（笑）友達には192センチみたいなのがいてさ、こいつは努力したわけじゃないんだよ。そうなったわけ。左利きがいて、右利きがいて、声の高い人がいて、低い人がいて。これは差異だよな。

おれたちは生まれつき全然違うの。ばらばらなんだよ。

色々な物語、出入りは自由

——絵本というのは、手を動かしながら考えるんですか。

そういう質問って最悪に難しいんだ。自分ではわからないんだよ。こないだも訊かれたよ、「どんなところで思い付いて、お描きになるんですか」って。もっとわからないのは「何のためにお描きになったんですか」って。わからないからやっているんだよね。わかったらやめちゃうだろうね。

要するに、描くのは好きなのね。考えるのも、組み立てるのも好きなんだよ。やっていて、「おれ何やってるんだろう」っていうのは後でわ

続きは本誌でどうぞ

特集

ZINE（ジン）——誰にも頼まれていないけど作りたい私のメディア

ZINEとは「個人または少人数のグループが自主的に制作し頒布する非営利の出版物」のこと。
ジャンルや形式は問わず、エッセイやイラストから日記のようなものまで多種多様です。
ZINEの歴史から、思いを一冊に綴じていく楽しみ、真宗との意外な関わりまで、
誰にも頼まれてはいないけど、作らずにはいられなくて作られてきた
「私のメディア」の魅力に迫ります。

写真と絵：ミキクワカド

インタビュー

紙とペンを持って何かを作るのがやっぱり一番面白いと、私は思ってしまうんですよね。

野中モモ（ライター・翻訳者）

ZINEは「出したい人が出したい時に出すもの」

——まず「ZINE」とは何なのか教えてください。

私としては、「個人または少人数のグループが自主的に制作し頒布する出版物」だと捉えています。そして「非営利であり、収益を上げることが第一の目的ではない」もの。ただ、定義するのは難しくて、状況によって変わってくると思うのですが、私としては「自主的」であることに重きを置きたいと考えています。

個人で制作するものですから、部数は1部から数百部の小部数のものが多く、コピー機や家庭用プリンター、軽オフセット印刷などの比較的低価格で利用できる印刷・製本の手法を用いることが多いです。そうすると、おのずとA5判のコピー、ホチキス留めという形がポピュラーになりますが、もっと形態から自由に作れるのも面白いところですね。また、製本していない一枚のニュースレター的なものも私はZINEに含めています。

——ZINEという言葉が広まる前から、自主的な出版物について、同人誌（同人雑誌）、ファンジン、ミニコミ、インディーズ・マガジン、リトルプレスと、さまざまな呼び方や方向性がありますね。

それぞれに特徴的なスタイルや作法のような、独自の文化が育まれてきました。いろいろな形がありますが、それぞれZINEと一部重なったり重ならなかったりします。ただ、これらに共通するのは、「出したいから出す」という出発点です。

現在の商業出版のシステムだと、本を全国の書店に行き渡る流通網に乗せたい場合、出版社として継続的に経営を続けていないと、取次業者や書店にも相手にされづらい。出版社は本を制作するうえでも、会社の経営を成り立たせるために数字を意識しなければなりません。それに対してZINEは、「出したい人が出したい時に出すもの」であると言えるでしょう。

出版社はどうしても情報や人が多い東京に集中しているし、そこから全国に届けられるという、いわばピラミッド型のヒエラルキー構造があります。その構造から離れて、横につながっていこうという気持ちが強いのがZINEだと思います。

——既存の出版システムにとらわれず、個人の主張や表現ができる場がZINEなのですね。

日本では、60年代ごろに「ミニコミ」と呼ばれる自主出版が盛んになります。ミニコミはマスコミの反対語として流行った和製英語で、小規模で自分たちの声を届ける「ミニマムコミュニケーション」のことです。当時、テレビ放送が普及して、マスコミがどんどん力を持つようになってきました。さらに60年の安保闘争で新聞が権力側についたことで、マスコミは結局のところ営利企業であり、市民が主張を伝えたり、議論を深めるにあたってあまり頼りにならない、という危機感を持った人たちがミニコミを作り始めました。見過ごされてしまいがちな個人の主張や表現をするというのが、市民による個人的な出版活動の根本にあると思います。

印刷技術とファンジン

——ZINEの歴史について改めて教えてください。

「自主的な出版活動」というくくりは広いので、実はいくらでもさかのぼれてしまいますが、あえてお話ししてみます。ドイツのグーテンベルクによって活版印刷が発明されたのが15世紀中頃です。初めにその技術を使えたのは教会や王族・貴族、またそうした権力の庇護を受けた学者ですよね。その後印刷技術は、産業革命と市民社会の到来を経て広く使われるようになり、18世紀に総合的な雑誌『The Gentleman's Magazine』がイギリスで誕生しました。「マガジン」という言葉の誕生です。

社会が豊かになるにつれ、本や雑誌を楽しむことができる人口が増えていきます。19世紀後半に、エジソンによって「ミメオグラフ」（謄写版印刷、ガリ版印刷）が発明され、出版が産業として成立していく一方で、何かのファンダム（ファン集団）を形成する人たちが作って読みあうファン・マガジン、略して「ファンジン」が生まれます。その元祖としてよく挙げられるのが、アメリカのシカゴのSF同好会が出した『The Comet』（1930年創刊、11頁）です。いまでこそSFは文学の一大ジャンルですが、当時はいわゆる正統的な文学からは下に見られがちで、そうしたマイナーなジャンルの魅力をファンが発信したものです。

70年代後半から、音楽・アート・ファッションなどさまざまな領域において既存の価値観を揺さぶるパンクカルチャーが興隆して、その発展にファンジンが貢献しました。ニューヨークの『PUNK』、ロンドンの『Sniffin'Glue』などのファンジンが有名です。それらは、大企業がパンクカルチャーを流行として消費しようとするのに対して、自分たちで表現し、生産・流通・批評を自分たちの手に取り戻そうという視点を持っていました。

以降、ファンジンのように「何かのファン」を含みながら、それだけに限定しないものも増え、「ZINE」と呼ぶのが一般的になったと理解しています。80年代にコピー機が簡単に利用できるようになってきて、アメリカではコピーショップのキンコーズが登場、日本でもコンビニコピーが使えるようになりました。ZINEの内容も、よりニッチかつ雑多でジャンル分け不可能なテーマだったり、同好の者で集まらず一人でも出せるようになってきて、極めてパーソナルな日記や手紙に近いものが増えます。また、90年代初頭、オリンピアとワシントンDCから世界各地に広がった、パンクとフェミニズムが結びついた運動「ライオット・ガール」は、ZINEがその発展に大きな役割を担ったムーブメントとして知られています。

インターネットの普及とZINEのリバイバル

——90年代になると、一般の人もインターネットを使えるようになります。

その影響は大きかったと思います。元々インターネットは、官公庁や軍、大学の人たちが主に使用していましたが、個人の手にも届くようになりました。その時に、個人の関心や主張

『日本のZINEについて知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス ―自主制作出版史1960～2010年代』
編著者：ばるぼら、野中モモ
発行：誠文堂新光社

『野中モモの「ZINE」小さな私のメディアを作る』
著者：野中モモ
発行：晶文社
定価：2,860円（税込）

続きは本誌でどうぞ

本もどき

panpanya

私はどうも「本のかたちをしたもの」に対する信頼が強い気がする。本の内容とは別に、「本のかたち」そのものに由来する信頼感というか、存在感の確かさを感じているように思える。

たとえばぺら紙の印刷物の束より、それが製本されていたほうがなんだか嬉しい。ぺら紙はぺら紙で好きなものだが、それらが一定の法則に基づいて整頓されタイトルが付くことによって、ひとつひとつは同じ情報だったとしても、雑多な集合の正体が見えるようになる、その確かさ。また、本には始まりと終わりがあるものだから、そこには時間軸が出来る。その軸の存在も、一本芯が通った感じに寄与するのかもしれない。

展覧会を見に行った時、実物を鑑賞するのよりもいい感じの図録を手にした時のほうが満足感がある、ということがままある。我ながら毎度なんだかなあと思うことだが、図録の魅力が翻(ひるがえ)って展覧会自体の満足度へ波及することもある。これも「本のかたち」が魅力や価値を担保しての現象のように思える。

旅先で、その土地に纏(まと)わる紙類を集める趣味がある。基本的には無料のものに限り、用のある観光案内パンフレット以外にも現地自治体の広報誌やら行きもしない施設の案内、包装紙、領収書、受け取ったアンケート用紙を出さずに持ち帰る等、ジャンルは問わない。

「なぜそんなものを」という反応をされることもある。そんな時はつい「趣味だから…」みたいな具のない回答をしてしまうが、強いて言うなら旅行という、本質的には形に残らない体験のなかで「その時にその場所に行った」という物的証拠を持ち帰りたいから、という感じだろうか。旅先でせっせと写真を撮るのと一寸似ているかもしれない。すぐにでも忘れてしまいかねない旅の断片を物質として持ち帰ることは道中の安心感にも繋がるし、集めている時はシンプルに得した気分になって嬉しいものである。

しかしそうして集めた紙類は、帰宅後どうなるかというと残念ながら結構邪魔になるものである。見返すわけでもないし、案外嵩張(かさば)るが、かといって捨てることはで

続きは本誌でどうぞ

ぱんぱんや

漫画家。2000年代よりウェブ上や同人誌即売会等で活動し、2013年、白泉社『楽園』にて商業デビュー。以降、同誌を中心に短編作品を継続的に発表、その装丁も全て自身が手掛ける。2018年文化庁メディア芸術祭にて『二匹目の金魚』が第22回マンガ部門審査委員会推薦作品に選出。

インタビュー

遅くて、おもしろくて、未知の世界をZINEで。

SAPPORO POSSE（デザイナー／ライター）

制作から発信までやる精神

——お名前の由来は？

最初、ウェブサイトを作りたいなと考えていて。音楽や映画とか色々なジャンルについて、あくまで個人の目線から書きたい気持ちがあったんです。それで各ジャンルについて、音楽関係の記事用の名前、映画評用の名前とか、全部設定して書いたらおもしろいんじゃないか、と。POSSEって「集団」みたいな意味なので、一人で名前を使い分けてクルーのように見せるコンセプトで、札幌でやってる集まり「SAPPORO POSSE」って名前にしました。でも、だんだんよくないアイデアに思えてきまして。まず面倒くさくなったというのが大きいんですけど（笑）、もうひとつはネット上でキャラを固め過ぎると危なっかしいかな、と。

たとえば「このペルソナはこんな設定だから」と、使いたくもない言葉をキャラに引っ張られて使ってしまうとか、ネットだとそんなことはよくあって、それは危ないし、精神的にもしんどいだろうなと思ってやめました。今となってはなんでこんな名前にしたんだろうなって思ってます（笑）。

——サッポロさんの個人サイト、また、昨年出版されたZINE『HYPERTEXT』などは、ご自身ですべてデザインされていますね。

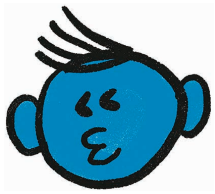
地方にいると、ある程度一人で全部やるというのは必然的になってきちゃうんです、多分。たとえば、僕が大好きなTHA BLUE HERBという北海道のヒップホップのユニットは、2000年代のはじめ頃からウェブでの発信を始めていて、すごく早かったんですよ。楽曲の制作だけじゃなくて発信の仕方まで、かなりの部分を自分たちでコントロールしていた印象があって、そうならざるを得な

続きは本誌でどうぞ

個人サイト「SAPPORO POSSE」。マンガ、音楽、美術、デザイン、近況報告などから、「神は存在するか？」といった宗教的課題まで多岐に渡る記事が楽しい仕掛けとともに掲載

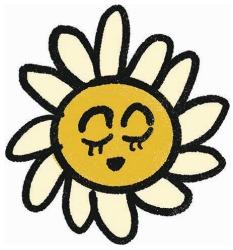
ブ・ポ・ソの語り場

受けとめると作りたくなる——浄土真宗とZINE？



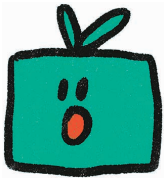
ブーブ

ぶうぶうと問いを立てるのが好き。
「聞かなきゃわからん！」



ポーポ

ぽわーんと答える。
「そうだね」と受け流すことがある。



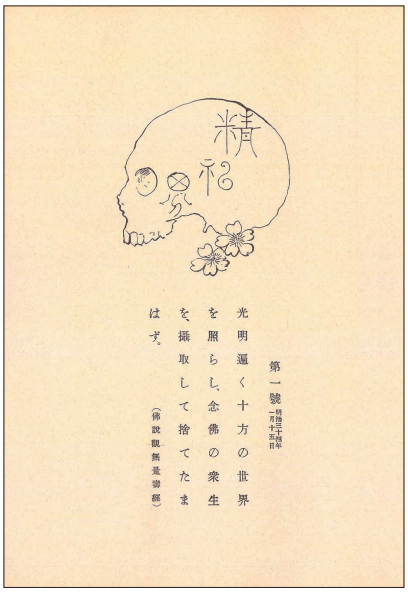
ソーソ

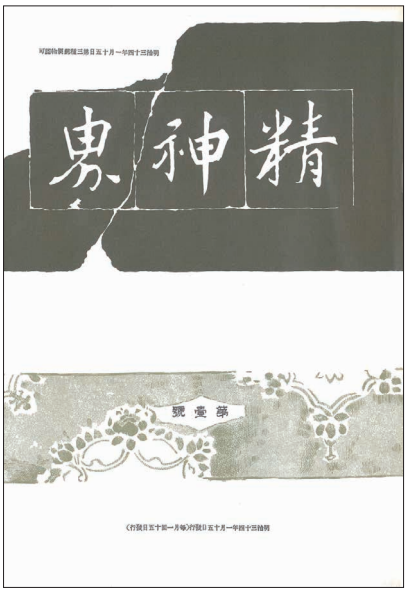
うなずきつつ、少し別の視点から
話をふくらませるのが得意？

ブーブ　今回の特集はZINEだけど、仏教と関係あるの？

ポーポ　ライターの野中モモさんは「誰にも頼まれていないけど自分が作りたいから作る自主的な出版物」「ZINEと聞いて何を思い浮かべるかは、その人の経験次第でかなり違ってくる」と書いてる（『日本のZINEについて知ってることすべて』）。とりわけ20世紀、文学者、芸術家、社会運動家などはよく雑誌を出した。もちろん宗教教団もね。信仰者有志の出版も結構ある。たとえば、1901年1月創刊の『精神界』。

ソーソ　哲学者で真宗の僧だった清沢満之（1863〜1903）のもと、当時若手の暁烏敏（1877〜1954）、佐々木月樵（1875〜1926）、多田鼎（1875〜1937）などが集まり、「浩々洞」という共同生活の場を結んだ。そこから生まれた、いわば「洞」人誌だね。出版の理由は鶯が鳴くのと同じだ、と。つまり、出したいから出す、それは自然、と言いたいみたい。





左は『精神界』創刊号（精神界発行所、1901年1月15日、B5判）表紙、右はトビラ。共に画家、中村不折による

ブ　つまり、自発的な活動なんだ？

ポ　当然。暁烏は、あまり仏教語を使わない仏教誌を作りたい、そして仏教界を刷新したいという熱意を抱いていた。

ソ　だからだと思うけど、「報道」というコーナーでは、東本願寺は財政が逼迫してるのに、宗教的かどうかわからない事業を「花火」のように打ち上げ、「善悪を識別するの目と、義を重んずるの精神に欠け居る」と批判してるよ。

ブ　手厳しいな！

ポ　暁烏は本を読むのも書くのも出すのも大好きで、14才で歌集を自作し、学生時に同人誌の創刊、

続きは本誌でどうぞ

後生の一大事を心にかけて
ニューヨークから開教便り

名倉 幹（なくら みき）
1962年京都府生まれ。ニューヨーク在住。真宗大谷派北米開教区開教使

第2回 仏法は内観やでー

私が仏教、なかんずく真宗の御教えを真の拠り所として歩むようになった因縁を申し上げましたら、それこそ無量の因縁としか言いようがありませんが、ある人とのかけがえのない出遇いが決定的なご縁となりました。

それは私が大学生の時、父が癌で倒れ、余命一年と診断されました。それを聞いた母は特に激しく落ち込み、「もう地球が爆発したらいい」とさえ申したほど、突然起こったこの現実を受け止め切れず、動揺を隠せませんでした。そのような家庭状況を知った大学のある先輩が、「そうか、大変やなー…。ちょっとお前に紹介したい人がいる」と、その先輩が下宿していた神戸にある家の大家さんの加藤辰子さんという老婦人をご紹介くださいました。

初対面の時から、何かしらん温かい、また力強いものを感じた私に加藤さんは、「名倉さん、いつでも遊びにきなさいや」と優しく声をかけてくださった。それから間も無く父は亡くなり母は大変心細くなり、その影響で私は内定が決まっていたある会社に進むことを、母の異常なる反対で断念せざるを得ないようになった。大事な就職先の選択において思わぬ事態が生じ、「なんでやねん、お母さん…」と、その時から母に対して非常なる怒り、腹立ち、不満が生ずるようになった。そして実際に就職した会社で「こんなはずではなかった…」と、自分の思い描いていた社会人生活とは異なる現実に何かしら不満、不平を感じつつ悶々とした日々を送るようになった。

そのようなことを加藤さんに聞いてもらいたいと思いお訪ねしましたら、「ふんふん、よーわかります」とじっと聞いてくださいましたが、それからしばらくして、「名倉さんは、お母さんがどうのこうの、今の会社がどうのこうのと、外ばっかり見てはりますねん。あんたはどうなんですか？ 名倉さんは自分が偉いと、善人やと思ってらっしゃいますやろ。自分が全然見えてませんねん。どこまでもどこまでも自分が見えてこなあかんのでっせ。仏法は内観やでー」と厳しく本当のことをおっしゃった。

そして、「私は体も弱いし、世間の付き合いも多くて忙しい身やけど、何をさしおいても仏法聴聞を最優先に歩んで参りました。それほど大事なことなんですよ、仏法を聞くことは。それも命懸けで聞かなあきませんよ」と明確におっしゃった。この出遇いが決定的なターニングポイントになり、ご師匠の蜂屋賢喜代先生のご著作を読むようになり、またその大阪のお寺で実際に聞法を始める機縁が開かれたのです。

息できる風景 25

森泉岳土

失敗はたのしい

前号の宣言どおり、長期滞在しながらアート活動するためフィンランドに来ている。無事に来られてよかった。

ここに来てからぼくは滞在している町や、そこで暮らす人々の絵を描いている。

マンガを描いていると当然だけど、下絵を描いてそこに本番の線を引くことになる。だけど、ぼくがいま描いている絵には下絵がない。フリーハンドの一発描きだ。緊張感があり、楽しく、そしてたびたび失敗する。失敗すると、

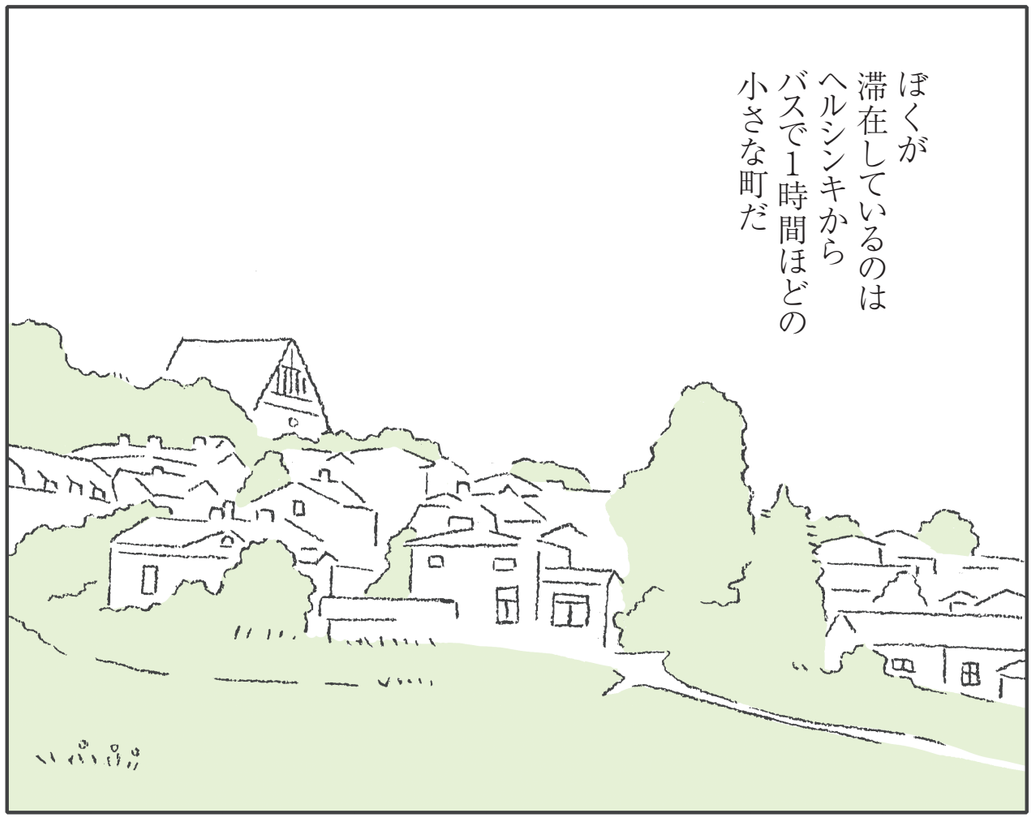
「あー」

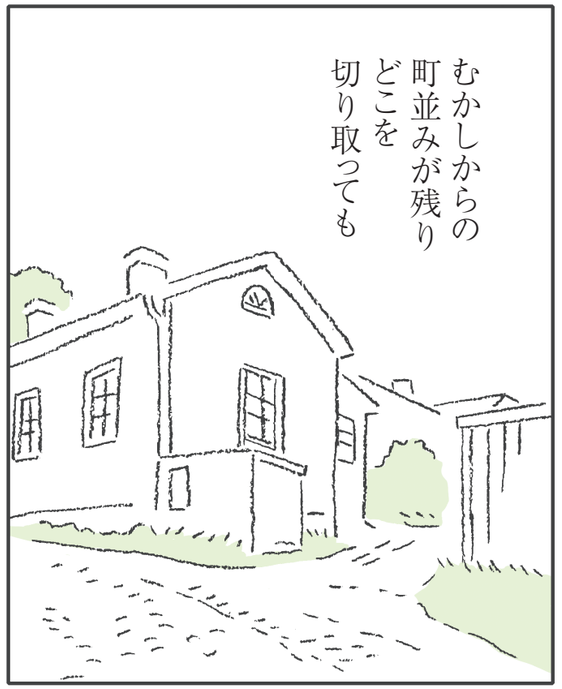
と頭を抱えながらも、それでもすくなくとも挑戦したという晴れ晴れとした満足感が残る。不思議なものだ。失敗しているんだけどね。

失敗の傾向を眺めてみると、だいたい小さく描きすぎたり、大きく描きすぎたりと、執筆のサイズを見誤っていることが多い。正確に描くということにばかり気を取られすぎていると、そんなところで思わず足をすくわれてしまう。

新しいことに挑戦するのは刺激的で、多くの発見があり、ぼくはいま、そんな贅沢な失敗に夢中になっている。

もりいずみ・たけひと●1975年生まれ。マンガ家。主な作品に『佐々々奈々の究明』(小学館)など。最新作にスタニスワフ・レムの原作をマンガ化した『ソラリス』(早川書房)がある。





これまでの『一切の幸せ』

昨年9月号より始まった連載小説『一切の幸せ』。文学研究者で小説家の岩川ありささんが紡ぎだす物語と、イラストレーターの惣田紗希さんによる挿絵を毎月、みなさんのお手元にお届けすることができました。全24話の予定ですから、今月の第13話から物語は後半に入るところ。これまでの『一切の幸せ』を簡単におさらいしておきましょう。

＊　＊　＊

まず、『一切の幸せ』というタイトル。実は『スッタニパータ』という古いお経の一節から着想されています。「一切の生きとし生けるものは、幸せであれ」（『ブッダのことば　スッタニパータ』、岩波文庫、37ページ）。「慈しみ」という章の一節です。

本屋さんのサユリ（右）とカフェを営むマキ（左）。大人たちもまた子どもたちにふれて変化していく（「第4話　劇的でない話」24年12月号より）

それぞれの人が怖れることなく、自分の幸せの物語を探していい。苦しみのなかにあっても、この世界に生きる足場、支えはある。岩川さんはこの言葉からそんな感銘を受けて、タイトルに選んだそうです。どんなに迷いつつも、光に満ちた世界を生きていくことができる。そう信じることができる、ということが物語の主題になっているとのこと。

下中央にいるのが主人公、カイ。LGBTQ＋の尊厳を讃えるパレードの様子で、水色とピンク、白からなる旗はトランスジェンダーを祝福する「トランスフラッグ」（「第9話　パレードの日はいつも」25年5月号より）

物語は小学4年生のカイがある町に引っ越してきたところから始まります。カイは、保護者のアカリ、犬のビサイと暮らしています。アカリはカイの母親の年下のきょうだいでもあるので、カイはアカリの姪でもあります。中学2年生のチエはよく家に来て泊まっていきます。チエのお母さんのマリはアカリの親友。マリは町の病院に勤める看護師で、夜勤のときなどは、チエをアカリの家に預ける間柄なのです。

カイの学校の担任、フカイは生徒たちをよく気づかっています。同級生は、親友のリカ、カイの隣家に住むリクなど。学校にはさまざまな子どもがいます。生まれたときにわりあてられたものと異なる性別を生きる人、日本以外にもルーツがある人、自分の心の暗がりに悩む人など、多彩な子どもたちが登場します。リカには医師になる夢があり、リクはサッカー部でがんばっています。

町には、さまざまな人たちが暮らしています。駅近くの本屋さんのサユリ、カフェを営むマキ、高台にある大きな古い家に住むトウコなど。彼女たちは、カイはもちろん、カイの同級生たち、保護者のアカリにとっても、生きるうえでの先輩、そして親しい友人でもあります。

ほかにも、チエの同級生で同じアイドルが好きなココノエ、隣の街の美容師で仕事道具の手入れのために町を訪れるタチバナなど、かれらは互いに出会ったり、出会わなかったり。たくさんの人とのめぐり合いが、季節の変化のなかで描かれていきます。主人公のカイが6年生になり、自分の進路を見つけていくまでの2年間、その日々の群像劇です。

岩川さんは言います。「悩んでいる人が多く登場します。問題はすぐには解決しないけれど、悩んだまま生きても、それがその人の物語、生きかたなんです。それぞれの人に尊厳がある。だから、「一切の幸せ」と言いつつも多幸感を描きたいわけではないです。苦しいな、でも生きてくか、という一人ひとりが「この世の一切の幸せを生きることができる」、そんなことを描きたい物語です」。

町の高台にある古い家に住むトウコ。カイの保護者、アカリが初めて町に来たときから恩を受けている人で、90歳になる（「第7話　光あふれる庭」25年3月号より）

カイたちの住む町。主な舞台となっている場所を話数で示した

続きは本誌でどうぞ

想像してみよう
この世から「国」がなくなったら？
難しい話じゃないよ
「敵国を殺せ」も「国のために死ね」も
なくなるんだ

"Imagine" John Lennon, 1971.

第25回

日々平熱のソウル

中田 亮

正義のクイズ

突然ですが、「正義のクイズ」なるものをつくってみました。

【設問】A国とB国のあいだで戦争が起こりました。人々の考えはわかれます。

ある人1「A国が正義だ、A国がんばれ」

ある人2「B国が正義だ、B国がんばれ」

ある人3「A国にもB国にも正義はない。正義はべつのところにある」

ある人4「正義は立場によって変わるものだ。AにはAの正義が、BにはBの正義がある」

（問一）ここにはたくさんの〝正義〟があるようです。いま、いくつあると考えられますか。

（問二）この中で「正義はたくさんある」と主張している人は何人いますか。

なぜこんなクイズをつくろうと思ったかと云いますと、正義について考えるとき、「正義とは人によって違う。人それぞれにちがう正義がある」なる主張をしばしば耳にするからです。そんな理屈が通るようであれば世の中から正義が消えて無くなってしまうじゃないか、と訴えたくて、それでこんなものを思い付いたのです。

（問一）の答えは「三つ」です。そして（問二）の答えはもちろん「一人」です。

何らかの正義を主張する人は、それが正しいと考えるから主張しているのであって、「正義はたくさんある」などと考えるはずがありません。ですから「正義はたくさんある」などと言葉にしたところで、それはどの陣営からも賛同を得ることはないのです。「正義は人それぞれ」という主張は、たんに「自分の考えを言わない」という、誰からも支持されない無責任な態度にすぎないわけです。

どんなものでもかならず突き通す矛（ほこ）と、どんな矛でも突き抜くことができない盾（たて）の二つを売っている販売員のようなものでしょう。

正義が定まらないという現実は往々にしてあるはずです。それでも「正義はさまざま」などと口にするのは、正しいこととは何か、善い行いとは何か、を考えることの放棄にほかならないのだと思います。

『アンパンマン』を描いたやなせたかしの言葉を思い出します。

《正義というのはね、逆転するんですよ。僕らは、兵隊にいって向こうへやられたとき、これは正義の戦いで中国の民衆を救わなくちゃいけないんだ、と言われた。ところが、（戦争が）終わってみれば、おれたちが非常に悪いやつで侵略をしていたってことになるわけでしょ。だからようするに、戦争に真の正義というものは無いんだ》

やなせたかしは、政府・軍部の云う「正義」に正義は無かったことに気づき、真の正義とは何かを考えました。彼は、困っている人や小さな子どもに食べ物をあたえることが本当の正義であるとしました。

『Imagine: Ultimate Collection』John Lennon
（ユニバーサルミュージックより発売中、"Imagine"収録）

なかた りょう
1972年大阪府生まれ。ミュージシャン。ファンクバンド「オーサカ＝モノレール」のボーカル担当。アフリカ系アメリカ人の文化を扱った映画の字幕監修や翻訳なども手がける。